

国費学部進学留学生の動機づけ、異文化適応、成績等の 関連について(II)

宮城 徹

【キーワード】 国費学部進学留学生、動機づけ、異文化適応、感情、質問紙

はじめに

前稿 (I) (宮城: 2011) では、本センター所属の国費学部進学留学生 (本稿では以下「1年コース生」と呼ぶことにする) の留学・学習動機づけ、日本における適応、そして成績の関連についての研究を進めるための基礎として、関連先行研究約 40 本を概観した。その結果、1年コース生に対する今後の具体的調査においては以下のような点を勘案して行うことが望ましいと推察できた (40-41)。

- (1) 彼らは「動機づけの高い集団」ではあるかもしれないが、その動機づけの内容にはかなり違いが予想できる。
- (2) 彼らの動機づけ、適応力、成績 (たとえば日本語能力) などの間の関係はいまだに明確に示されていない。
- (3) 同級生との関連から彼らの異文化適応をとらえることはなされてこなかった。
- (4) 彼らの日本語能力を測るためにはこれまでほとんど行われてこなかった外部基準の能力テストを実施する必要がある。

これらの結果に基づき、2011年3月に1年コース生に対して、動機づけ、異文化適応、感情、日本語読解能力について調査を行った。本稿ではそのうち、動機づけ、異文化適応、感情の関連についての結果を分析する。日本語読解能力 (外部テスト) とセンター内試験結果の関連についての分析は次回に行う。

1. 本稿の目的

上記の4点のうち、本稿では、(1)、(2) に着目し、

1年コース生の留学動機づけ、社会文化的適応、感情にはどのような関連性がある

るのかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2-1. 関連（パイロット）研究：佐藤（2011）

前稿では言及できなかったが、直接本研究に関連し、パイロット研究的役割を果たした研究について、以下に触れておく。本研究は以下の研究と同一対象者に対して並行して進められたものであり、同じ質問紙を用いるなど重なる部分が多い。

佐藤（2011）¹は、1年コース生約50名を対象に、動機づけ、感情、異文化適応（社会文化的困難）の3点の関連性について、来日3か月時と来日1年時の2期に調査し、比較検討している。ここでいう動機づけは、Deci and Ryan（1985）の動機づけ分類に基づいている。この分類は「内発的動機づけ」、「同一化的制御」、「統制的動機づけ」（これはさらに「取入的制御」と「外的制御」に分類される）からなり、「内発的動機づけ」「同一化的制御」「取入的制御」「外的制御」の順に自己決定性が低下していくとされる。さらに佐藤（2011）ではこの動機づけの測定にはChirkov et al.（2008）のSelf-regulation Questionnaire-study abroad（以下SRQ-SAとする）の短縮版を用いている。

次に佐藤研究で感情とは、「普段自分がいただいている感情特性」のことを指し、Tellegen, Watson, & Clark（1988）の2因子説に従い、測定にはポジティブ・ネガティブ感情尺度（Positive and Negative Affect Schedule: 以下PANASとする）の国際簡略版（Thompson, 2007）を用いている。

最後に異文化適応をソーシャルスキル（対人関係改善スキル）、言語コミュニケーション、ホスト文化学習スキルなどの総体と考える立場に立ち、Ward & Kennedy（1999）の社会文化的適応尺度（The socio-cultural adaptation scale: 以下SCASとする）を用いている。

（佐藤研究の結果：来日3か月調査）

留学の動機づけと社会文化的困難性（適応）の間の関連では、動機づけの中の「取入的制御」（外的に決定されているわけではないが、真の自発的な意思による行動の自己制御ではなく、外的な圧力を内的な圧力に置き換えただけのもの。「～しなければならない」「～するしか仕方がない」といったセルフトークに基づく行動

¹ この研究は修士論文研究として実施されたものであるが、著者が主指導教員として関わり、データ収集においても著者の責任で行った。

傾向で、内なる想いと葛藤感が伴うこともある)のみが適応との間に中程度の有意な相関が見られた ($r = .37, p < .05$)。

次に、動機づけと感情の関連では、内発的動機づけ(最も自己決定的な動機づけ)とポジティブ感情間に $r = .30, p < .05$ 、同一化的制御(内発的動機づけに次ぐ、自己決定的な動機づけ)とポジティブ感情の間に $r = .32, p < .05$ 、そして取入れ的制御とネガティブ感情の間に $r = .37, p < .05$ のそれぞれ中程度の有意な相関が見られた。

さらに、感情と適応の関係では、ネガティブ感情と社会文化的困難の間にのみ、 $r = .62, p < .01$ という有意な強い相関が見られた²。

(結果：来日 1 年調査)

同じ 3 種の質問紙を実施したが、来日 3 か月目の結果との比較(平均値の差の検定)で、社会文化的適応の数値が有意に増加していることが分かった³。

測定対象の 3 項目を見ると、留学動機づけと社会文化的適応間においては、3 か月時と同様、取入れ的制御と適応困難度の中程度 ($r = .37, p < .05$) の有意な相関がみられた。しかし 3 か月時には存在していた内発的動機づけとポジティブ感情間、同一化的制御とポジティブ感情間には、有意な相関は見られなかった。また取入れ的制御とネガティブ感情の間には、3 か月時と同様、 $r = .52, p < .01$ の、またネガティブ感情と適応困難度の間にも、 $r = .50, p < .01$ の有意な強い相関がそれぞれ見られた。

佐藤(2011)の研究はさらに進んで、感情を中心とする普遍的な三者間モデルの構築を目標としたが、結論として、マイナス感情が不適応を引き起こす可能性(取入れ的制御⇒ネガティブ感情⇒社会文化的困難)を示し、カウンセリングやストレスマネジメント教育でのネガティブ感情の取り扱いの重要性を示唆している。

佐藤(2011)研究で注意しなければならないことは、修士論文としての時間的制約から、2010 年度学生の留学 1 年時データと 2011 年度学生の留学 3 か月時データを時間的に入れ替えて分析せざるを得なかった点である。これについては双方

² この来日 3 か月の結果について、有意な相関が見られた各項目は特に想定を覆すものはないと言える。しかし内発的動機づけと社会文化的適応の間、ポジティブ感情と社会文化的適応の間、それぞれに有意な相関が見られなかったことは、注意すべきで、更なる検討が必要である。

³ これについて佐藤は特に言及していないが、適応困難度が増加している可能性を示唆するもので、注意が必要である。

のデータの分散分析等を行い⁴、母集団を同一のものとして判断した上で実施している。手続的には問題がないが、もし 2011 年度学生の留学 1 年時データが分析できればより良いということになる。そこで本研究では、2011 年度学生の留学 1 年時データを分析対象として、検証をすることとした。

2-2. 質問紙調査の方法

1 年コース生を対象にして、2-1 の佐藤研究と同様の 3 種の質問紙を用いた調査を行った。3 種とは、留学の動機づけを測る SRQ-SA、感情情緒的特性を測る PANAS、異文化適応を測る SCAS である。本研究はセンター内の 1 年コース会議の承認を得て実施された。

(回答者) 2010 年度 1 年コース留学生 50 名中、事前の呼びかけに応じた 45 名が自主的に参加した。参加者には薄謝が支払われ、日本語能力読解試験結果については個人に知らされるという条件であった。調査開始時に口頭で説明し、合意を得た。

(時期) 2011 年 3 月 3 日 (すべての授業、試験、判定会議などが終了した段階であり、この質問紙の結果は成績その他には一切影響しないこと、個人を特定されるようなデータ開示はなされないことは周知されていた。)

(調査方法) 全員が一つの教室で、筆者によって集合調査形式で実施された。まず日本語能力(読解)テスト(40分)を実施後、謝礼支払いのための事務的手続きを行った(約15分)。その後、留学動機づけ質問紙(SRQ-SA)、感情尺度質問紙(PANAS)、社会文化的適応尺度質問紙(SCAS)がセットになったものを配布、実施した(約20分)。回答は全て記名で行われた。合計所要時間は約90分であった。

(調査内容: テスト及び質問紙) 動機づけ(SRQ-SA)、感情(PANAS)、適応(SCAS)の質問紙: それぞれオリジナル版に佐藤(2011)が作成した和訳併記版を使用した。和訳併記版を利用した理由は二つある。第一には留学生の日本語レベルから、日本語の質問文では理解できなかつたり、誤解されたりする可能性があるためである。かといって、英語を母語としている者も少ないため、英文和文併記として、いずれも参考にして答えられるように配慮したからである。第二の理由は、

⁴ 分散分析に加えて、構造方程式モデリングの一つである多母集団分析も実施している。その結果、変数間関係における母集団の等価性も認められた。

新たに3種の質問紙の日本語版を作成するのは時間的に困難であったからである。

SRQ-SA と PANAS は全体が 10 項目からなり、「1: 全然そう思わない」から「5: 非常にそう思う」までの 5 段階評価で、SCAS は全体が 20 項目、「1: 全然困難ではない」から「5: 非常に困難である」までの 5 段階評価である。つまり、SRQ-SA と PANAS においては点数が高い方がより望ましいことになるが、SCAS においては点数が高いほど困難性を感じる（適応が低い）ことになる。したがって SCAS はむしろ「社会文化的不適応尺度質問紙」とみなした方がわかりやすいことになる⁵。

2-3. データの処理

日本語読解試験については、集計処理をし、得点分布などを見た。その結果と他の質問紙の結果、センター内試験の結果については、相関を見た。

3. 結果

3-1. 動機づけ、感情、適応の関連

Table1 に SRQ-SA、SCAS、PANAS の得点間の相関を示す。これによると動機づけのサブカテゴリーである同一化的制御と内発的動機づけに中程度の相関が、外発的制御と内発的動機づけに中程度の負の相関が見られたが、これは各カテゴリーの性格上、妥当な結果である。一方、異文化適応に関しては、動機づけや感情との明確な相関は見られなかった。だが感情に関しては、取入的制御とネガティブ感情の間に中程度の有意な相関が認められた。

⁵ 日本語（読解）能力テスト：旧「日本語能力試験 2 級」の読解セクションの過去問題を参考に、20 問（4 択）を作成し、使用した。答えはマークシート用紙に鉛筆で記入してもらった。通常のセンター内試験の結果：冬学期の日本語（文法、文字・語彙、読解、聴解の 4 種類）期末試験の結果を比較のため使用した。このうち、文字・語彙、文法試験は授業で使用した教科書の内容をもとに作成された理解度試験であり、読解試験は外部作成の問題を 1 年コース生用に修正した問題から成り、聴解試験は場面設定は同じであるが、授業で扱っていない内容である。

Table 1. 動機づけ、適応、感情のピアソン相関

		内発的	同一化的 制御	取入れ的 制御	外的制御	SCAS	ポジティ ブ感情	ネガティ ブ感情
内発的	相関	1	.445*	-.090	-.329*	-.186	.221	-.183
	有意確率		.002	.557	.027	.221	.150	.229
同一化 的制御	相関		1	.143	-.155	-.075	.296	.071
	有意確率			.349	.310	.626	.051	.644
取入れ 的制御	相関			1	.466**	.154	.175	.329*
	有意確率				.001	.313	.256	.027
外的制御	相関				1	.076	.179	.135
	有意確率					.619	.246	.376
SCAS	相関					1	-.099	.291
	有意確率						.523	.052
ポジティ ブ感情	相関						1	.223
	有意確率							.146
ネガティ ブ感情	相関							1
	有意確率							

** . 有意 0.01 レベル (両側検定).

* . 有意 0.05 レベル (両側検定).

3-2. 3 か月時と 1 年時の変化

佐藤 (2011) で得られた 2010 年度生の留学 3 か月時の結果で相関がみられた部分を表したのが、Figure1 である。

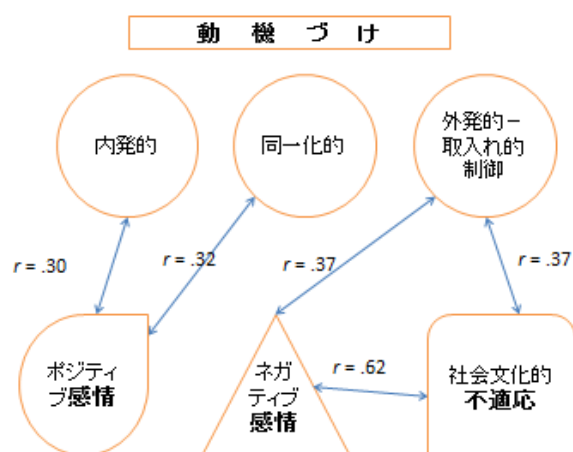


Figure 1. 留学3か月時の相関

一方、本調査（留学1年時）において、3項目で相関が見られた部分を図示すると、Figure 2.のようになる。

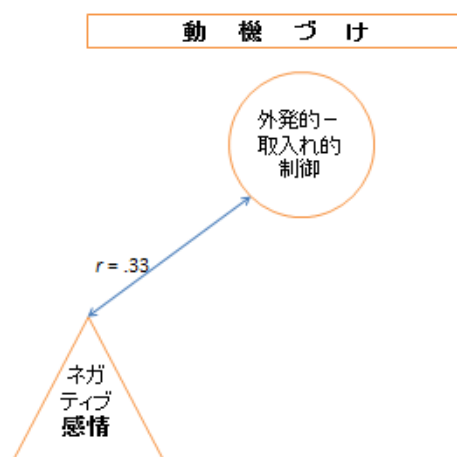


Figure 2. 留学1年時の相関

この二つの図で明らかなように、留学1年後においては、3項目間の相関はほとんど見られなくなっている。

4. 考察

4-1. 留学動機づけ、異文化適応、感情の関連（内部相関）

本調査（留学1年時）においても、取入れ的制御とネガティブ感情に中程度の有意な正の相関が認められた。この点は佐藤（2011）の結果とも一致している。佐藤研究の来日3か月時と本調査来日1年時の結果を比較して考えると、外発的動機づけの一形態である取入れ的制御が動機づけの中心にある留学生にとっては、社会文化的困難性に関しては時間の経過とともに軽減される傾向があるが、1年滞在后も自己に関わる状況に対し否定的感情を抱く傾向が続いていることが予想される⁶。

一方で、内発的動機づけ、同一化的制御といった自己決定性の高い動機づけが中心にある留学生は、当初ポジティブな感情を示すが、来日1年時には必ずしもそうではなくなっていることが推測できる。またネガティブ感情を抱き易い留学生は社会的不適応傾向が高いというわけではない。

⁶ 佐藤（2011）は更なる分析の結果、3者の方向性（因果関係）を求め、マイナス感情が不適応を引き起こす可能性（取入れ的制御⇒ネガティブ感情⇒社会文化的困難）を示唆している。本研究ではその点を追試することはしなかったが、佐藤の結果を否定する結果にはなっていない。

4-2. 佐藤研究の結果との相違

しかし全体として、調査した 3 項目間の相関は来日 1 年時にはほとんど見られないという結果になった。これらの結果は、佐藤 (2011) の来日 1 年時結果と一致するものではない。佐藤研究でみられた取入的制御と社会文化的困難性間の正の相関 ($r = .37$) とネガティブ感情と社会文化的困難性間の正の相関 ($r = .50$) については、本調査では認めることができなかった。特に後者は佐藤研究では強い相関が見られていたので、本研究結果との差は際立っている。

ここで検討すべき点はいろいろあるが、結果の違いを云々する以前に、調査方法上の問題が大きいということは否定できない。まず調査対象となる留学生母集団が小さく、十分な統計的比較がしにくいということが考えられる。また佐藤研究の来日 1 年時結果は、既に述べたように前年度学生に対する調査結果を使用しているため、やや精度が落ちている可能性は否定できないだろう。さらに、佐藤研究に際しては、学生は無報酬で参加しているのに対し、本研究時には協力費が支払われた。これによって回答者の動機づけに差が出たことは容易に考えられる。このことは、佐藤研究においては、欠損値がいくつか見られたが、本研究においては見られなかったことから明らかである。

さらに本センター留学生は出身国にかなりの広がりがあり、英語母語話者は非常に限られている。日本という場に集う世界中の留学生から等距離に近い言語ということ、日本語か英語と考えることは決して誤りではないだろうが、1 年コース生、それも留学 3 か月時の場合は、日本語も英語も決して流暢でない者も少なくない。質問の意味を十分に把握できていたかどうか疑問もある。この点については、今後の課題である。

以上のように、調査方法上の問題が大きく結果に影響している可能性があるため、先行研究との差を詳しく考察することはあまり意味がないと考えられる。

まとめ

本研究では、1 年コース生の留学動機づけ、感情、社会文化的適応の関係を調査し、分析した。佐藤 (2011) が指摘した留学 3 か月時でみられた 3 者間の相関は、取入的動機づけの強さとネガティブ感情との相関を除き、みられなかった。つまり留学 1 年後においては、留学前に抱いていた留学に対する動機づけ (自己決定性)、普段抱き易い感情の肯定性・否定性の程度、日本社会への適応の良否といった 3 者間にほとんど関連は見出せなかった。

ここに日本語能力、センターでの成績という項目を加えて、たとえば適応との関連を見たらどうなるであろうか、これについては続号で検討する。

<付記>

本稿をまとめるにあたり、佐藤出氏（元本学大学院日本語教育学専修コース学生、現オタゴ大学博士課程）に統計処理をお願いしました。深くお礼いたします。また調査にご協力いただいた2010年度1年コース学生の皆様に心からお礼申し上げます。

引用文献

- Chirkov, V. , Safdar, S., de Guzman, J., & Playford, K. (2008) Further examining the role motivation to study abroad plays in the adaptation of international students in Canada. *International Journal of Intercultural Relations*. 32 (5), 427-440.
- Deci, E., & Ryan, R. (1985) *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*: Springer.
- 宮城徹 (2011) 「国費学部進学留学生の動機づけ、異文化適応、成績等の関連について (I) : 関連先行研究についてのレビュー」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 37 号 29-45
- 佐藤出 (2011) 『日本留学の「動機づけ」と「社会文化的適応」の間における「感情」の果たす役割についての研究 — 普遍的な三者間関係モデルの構築をめざして—』東京外国語大学大学院総合国際学研究科（言語応用専攻）日本語教育学専修コース修士論文
- Tellegen, A., Watson, D., & Clark, L. (1988) Development and validation of brief measures of positive and negative affect: The PANAS scales. *Journal of personality and social psychology*. 54(6), 1063-1070.
- Thompson, E. (2007) Development and validation of an internationally reliable short-form of the positive and negative affect schedule (PANAS). *Journal of Cross-cultural Psychology*. 38(2), 227.